



Title	福岡市若年層方言のッテ：標準語の「って」と対比して
Author(s)	平塚, 雄亮
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2011, 9, p. 55-65
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/23233">https://doi.org/10.18910/23233</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 福岡市若年層方言のッテ

——標準語の「って」と対比して——

平塚 雄亮

【キーワード】福岡市若年層方言、ッテ、引用、伝聞、ノダ文

### 【要旨】

本稿では、福岡市若年層方言における引用や伝聞などを表すッテについて、標準語の「って」と対比しながら記述を行った。その結果明らかになったのは、以下の3点である。

- (a) ッテは伝聞の用法においては、ト(標準語のノダに相当する)に接続することはできない。文末詞はヨ・ネ・ゼ・サが共起できる(引用・伝聞の場合)。
- (b) ッテの基本的な用法は、標準語の「って」と同じく引用と伝聞である。また、話し手との知識・認識のずれを明示する用法がある。ノダ文に接続するッテは文末詞的な用法をもち、ッテが接続した文が「一連の発話のうち、話し手の最も伝えたいことである」ことをマークする。また、「そうトッテ」という表現は、「聞き手の認識との一致」を表す。
- (c) ノダ文に接続するッテの用法(最も伝えたいことをマークする)は、話し手との知識・認識のずれを明示する用法が拡張したものであると考えられる。また、伝聞には非ノダ文を、最も伝えたいことをマークする用法にはノダ文を用いるという明晰化の働きも見られる。

### 1. はじめに

福岡市若年層方言は、引用や伝聞にッテというマーカを用いる。

(1) (電話で)お母さんが「早く帰ってきなさい」ッテ。 【引用】

(2) 天気予報によると、明日は雨が降るッテ。 【伝聞】

伝統方言にはゲナとテというマーカが存在するが、若年層においては、ゲナは引用や伝聞としてはほとんど用いられなくなっており<sup>1)</sup>、また、テもッテと促音をともない<sup>2)</sup>、標準語と同形になっている。しかしながら、標準語と全く同じふるまいをするわけではなく、(3)のようにノダ文(以下、準体助詞トがムードのノダ(野田1997)をマークするような文のことを、福岡市方言のノダ文とする)に接続するときには、ッテは引用や伝聞マーカとし

1) 若年層においては、ゲナは引用や伝聞のマーカとしての働きはッテに譲り、否定的特立を表すようになってきている(陣内1993、二階堂1998、松尾2009)。これは伝統方言にはなかった用法である。

(a) 数学ゲナ絶対勉強したくない。(数学なんて)

2) ただし、疑問詞「何」に接続するときの「何テ」というテは語彙的に存在する(「何ッテ」もある)。

ては使用することができない<sup>3)</sup>。このような場合、福岡市若年層方言においては非ノダ文にッテが接続して用いられる(#は語用論的に不適切であることを示す。ひらがな表記の「って」は標準語形を表す。トは当該方言の準体助詞)。

(3) A: あの人、あんな格好してどこに行くのかな?

B: 今日は同窓会がある {#トッテ/ッテ/んだって/って}。 【伝聞】

ノダ文に接続するッテは文法的に不適格であるというわけではなく、「新情報を表す」用法で使われる (坪内 2009)。

(4) ねえねえ! 聞いて聞いて! 天神で買い物してクジ引いたら、温泉旅行が当たった  
トッテー! (坪内 2009)

以上のようなふるまいをするッテについては、まだ詳細な文法記述がなされているとは言えない。そこで本稿では、筆者 (1983 年生まれ (27 歳) 男性、1 年間の海外留学を除き 23 歳までを福岡市で過ごした) の内省をもとに、福岡市若年層方言のッテについて、標準語の「って」と対比させながら記述を行うことを目的とする。標準語の内省も筆者による。

以下、2 節でッテと「って」の生起環境について整理し、3 節でそれらの意味・用法について述べる。4 節では、ノダ文に接続するッテの用法の発達についてまとめる。5 節はまとめと今後の課題である。なお本稿で用いる例文は、議論の対象となる要素のみをカタカナ表記の方言形とし、その他の部分は理解の便を考慮して標準語形で示す。

## 2. 生起環境

まず 2 節では、ッテと「って」が生起する環境について整理する。2.1 節で生起する文タイプについて、2.2 節でッテと共起する文末詞について述べる。

### 2.1. 生起する文タイプ

1 節で述べたように、福岡市若年層方言においては、ッテに前接する述語が非ノダ文であるかノダ文であるかが用法の違いに関わっている。そこで、ここでは非ノダ文・ノダ文との共起関係に注目することにする。福岡市方言においては (5)、(6) のように、どのような用法であれ、ッテの前にコピュラ「ヤ」が現れることはない<sup>4)</sup> (\*は文法的に不適格であることを示す)。

(5) 明日は雨が降る {トッテ/\*トヤッテ}。

(6) 明日は雨 {ッテ/\*ヤッテ}。

このような事実から、以下、ッテの非ノダ文は〈述語+ッテ〉、ノダ文は〈述語+ト+ッテ〉を指すことにする。

福岡市若年層の用いるッテ、標準語の「って」が生起する文タイプは以下のようなものである (ここでは便宜的に伝聞の場合について記す)。

3) 伝統方言のゲナ・テは使用することができる。ゲナ・テの記述については、坪内 (2004) を参考にされたい。

4) このような福岡市若年層方言におけるコピュラのふるまいについては、原田 (2009) に詳しい。

- (7) 明日は雨が降る {ッテ/って}。 【平叙文・非ノダ文】  
 (8) 明日は雨が降る {#トッテ/んだって}。 【平叙文・ノダ文】  
 (9) 明日は雨が降る {ッテ/って} ? 【真偽疑問文・非ノダ文】  
 (10) 明日は雨が降る {\*トッテ/んだって} ? 【真偽疑問文・ノダ文】  
 (11) いつ雨が降る {ッテ/って} ? 【疑問詞疑問文・非ノダ文】  
 (12) いつ雨が降る {\*トッテ/んだって} ? 【疑問詞疑問文・ノダ文】

ッテはノダ文でなければ平叙文にも疑問文にも生起することができるが、(10) や (12) のようなノダ文の疑問文には生起しない。また (8) のようなノダ文の平叙文における生起は可能であるが、(7) とは違い、伝聞とは違う用法をもつ (3.4 節で述べる)。標準語の「って」は特に文タイプの制限がなく、ッテよりも広く生起できる。

## 2.2. 共起する文末詞

引用や伝聞を表すッテにはヨ・ネ・ゼ・サが共起できる<sup>5)</sup>。それぞれが表す意味についてはここでは踏み込まない。

- (13) 明日は雨が降るッテ {ヨ/ネ/ゼ/サ}。

ただし 3.4.1 節で述べるが、このような文末詞の共起は引用や伝聞の用法の場合に限られる。

## 3. 意味・用法

3 節ではッテのもつ意味・用法について、標準語の「って」と対比させながら記述する。加藤 (2007) によれば、標準語の「って」のもつ用法は多岐にわたるが、本稿では基本的な引用・伝聞の用法、そして話し手との知識・認識のずれを明示する用法、ノダ文に接続するッテの用法を取り上げることにする。以下、3.1 節で引用について、3.2 節で伝聞について、3.3 節で話し手との知識・認識のずれを明示する用法について、3.4 節でノダ文に接続するッテの用法について説明する。

### 3.1. 引用

藤田 (2003) では、引用は「もとのことばをその形を引き写して再現する形で示そうとするもの」とであると定義されている。福岡市若年層方言においては、ッテがこの引用の用法をもっている。

- (14) 先生が「職員室に來い」{ッテ/って}。

引用のッテは必ずしも文末で用いられる必要はなく、「言う」などの表現を続けることもできる。

- (15) 先生が「職員室に來い」{ッテ/って} 言っていたよ。

また、話し手以外の発話を引用した場合のほか、話し手自身の発話を引用し、復唱する

5) ッテに伝統方言の文末詞バイやタイは接続させにくい、これは意味的な問題というよりは、若年層においてはそもそもバイはほとんど用いられることはなく、タイも名詞やノダ文にしか接続しなくなっているといった要因による。

ような場合や、相手の言ったことがよく聞こえなかったときに聞き返すような疑問文にもツテが用いられる。前者の例を (16)、後者の例を (17) として示す。

(16) A: 今度旅行に行こうよ。

B: ごめん、今何て言ったの?

A: 「今度旅行に行こう」{ツテ/って} 言ったの。

(17) A: 今度旅行に行こうよ。

B: え? 「今度旅行に行こうよ」{ツテ/って} ?

このように引用の用法においては、標準語の「って」との違いは見られない。

2.1 節では非ノダ文・ノダ文の違いが文法性に関する伝聞の用法 (3.2 節で述べる) を例にとったが、この引用の用法ではツテに前接するのが非ノダ文であるか、ノダ文であるかといったことは問題にならない。なぜなら引用とは、

(18) お母さんが「早くお風呂に入りなさいよ」{ツテ/って} 言ってるよ。

(19) あいつ、「絶対野球選手になるんだ」{ツテ/って} 言ってたよ。

のように、メタ的に引き写されるものであるからである。

### 3.2. 伝聞

藤田 (2003) では、伝聞は「言語的情報を受けいれて、その内容を自らのことばで伝えようとするもの」であると定義されている。ツテは、このような伝聞を示すマーカとしても用いられる。方言によっては 3.1 節で述べた引用と伝聞を形式によって表し分けるものもある<sup>6)</sup> が、福岡市若年層方言においてはどちらもツテで表すことができる<sup>7)</sup>。

(20) あの人、今度引っ越す {ツテ/って}。

伝聞の用法においては、標準語の「って」とは違い、ツテは非ノダ文に接続することしかできず、ノダ文に接続することができない。

(21) あの人、最近忙しそうですね? 今度引っ越す {#トツテ/ツテ/んだって/って}。

既に 2.1 節でも触れたことであるが、このようにノダ文に接続するツテは伝聞とは解釈されない。このような場合、3.4 節で述べるような、伝聞とは違った用法をもつことになる。

また、平叙文のみならず、疑問文においてもツテには非ノダ文のみが接続し、ノダ文が用いられることはない。

(22) A さんから聞いたんだけど、君、今度引っ越す {\*トツテ/ツテ/んだって/って} ?

野田 (1997) によると、標準語の伝聞マーカ「って」はノダ文を用いないと不自然になる場合があるという<sup>8)</sup>。野田 (1997) では、(23) のような例がそうであるとされている (?? はかなり不自然であることを示す)。

(23) 高梨次長が言うには、とつても親しげに囁く {んだって/??って}。

6) たとえば岐阜市方言では、引用にツテ、伝聞にトを用いる (芝田 2008)。

7) このほかに、伝聞に関連する表現としてミタイやラシイなども存在する。

8) ただし、どのような文脈のときに不自然になるのかについては明らかでない。

一方ッテの場合は、(21) で示したようにそもそもノダ文が用いられることはないが、(23) のような場合でも非ノダ文が用いられ、何ら不自然さはない。

(23') 高梨次長が言うには、とつても親しげに囁く {#トッテ/ッテ}。

このような例を疑問文にしたときも、(22) と同様にノダ文にッテを接続させることはできない。

(24) (高梨次長によると) とつても親しげに囁く {\*トッテ/ッテ/んだって} ?

以上、3.2 節で述べたことをまとめると、以下のようになる。

(25) ッテは伝聞を表すときは、非ノダ文に接続する。ノダ文に接続した場合は伝聞の用法とは解釈されない。標準語の「って」はノダ文と非ノダ文の両方に接続するが、(23) のようにノダ文を用いないと不自然になる場合がある。福岡市若年層方言のッテの場合にはそのようなことはない。

### 3.3. 話し手との知識・認識のずれの明示

ッテは引用や伝聞のほかに、話し手との知識・認識のずれを明示する用法ももっている。これは、発話時に話し手と聞き手のもっている情報量が違うことを前提に用いられるもので、話し手が既に言ったことが聞き手に聞こえていなかったり、忘れていたり、納得していない場合に再度伝えるものである。

(26) A : 今年開通する九州新幹線の名前って、つばめだったよね。

B : いや、さくらだよ。

A : 何言ってるの? つばめ {ッテ/だって}。

B : いやいや、さくら {ッテ/だって}。

(27) A : 今日は先に帰っていいよ。

B : え、でも。

A : いいから、早く帰れ {ッテ/って}。

(26) では A も B もッテを用いることで、聞き手を納得させてやうという態度を示している。(27) では、納得していない B の態度を変えさせやうとする効果をッテが担っている。この用法においては、3.2 節で述べた伝聞の用法とは違い、(28) のようにノダ文にッテを接続させることができる。非ノダ文にしても適格性に違いはない。

(28) (旅行の予定について話している)

A : じゃあ、来週の週末はどう?

B : だから、来週は仕事がある {トッテ/ッテ/んだって/って}。さっきも言ったじゃないか。

なお東京方言には、以上のような用法に特化したッテバというマーカがあるが(辻 2001)、福岡市方言にはそのように特化したマーカは存在しない。

また、疑問詞疑問文にッテが接続することでも、話し手との認識のずれの明示を行うことができる。必ずしも(29) のように聞き手との知識・認識のずれを問題にする場合に限らず、(30) のように何らかの事態が話し手の思ったとおりでない場合もありうる。よって、独話も可能である。(28) と同様、ノダ文も用いることができる((30))。

(29) A: (自分の描いた絵を見せながら) ほら、うまいでしょう？

B: どこがヤッテ<sup>9)</sup>！全然うまくないじゃないか。

(30) (ラーメンをバリカタで注文したのに、思ったよりやわらかかった)

(独話で) 何でこんなにやわらかいとヤッテ！

(26) ~ (28) のような場合は標準語の「って」にも認められる用法であろうが、(29)、(30) のような疑問詞疑問文の場合、「って」は用いにくいと思われ、これは福岡市若年層方言のツテに特有のものであると思われる。

### 3.4. ノダ文に接続するツテ

3.2 節で述べたように、ノダ文に接続するツテは伝聞の用法ではなく、文末詞的な用法として使われ、もはや話者の意識としてはトツテが1つの固定化した表現のようになっている。楢田 (1992) では「何か強烈なことが起こったときに、他人に自分の熱い気持ちを伝えるため」、「とにかく人に言いたくてたまらないとき」に用いられる「強調表現」であると説明されており、坪内 (2009) では「新情報を表す」とされている。しかし、これだけの記述では不十分のように思われるため、ここではノダ文にツテが用いられる場合(「~トツテ。」の場合)とそうでない場合(単に「~ト。」で終わる場合)の違いについて述べることで、トツテの用法を明らかにする。

#### 3.4.1. 基本的意味

ノダ文に接続するツテは伝聞としては解釈されない。このときの基本的な意味は次のようである。

(31) 聞き手が当該情報についての情報をもたないことを前提に、その発話が聞き手にとって重要な情報であることを訴えかける

この用法においては、3.3 節で示した「話し手との知識・認識のずれを明示する」用法とは違い、会話の第一発話部から用いられることもある。

(32) 聞いてよ、僕、甕島に調査に行く {トツテ/#ツテ/\*んだって}。

(33) 君は知らないだろうけど、玄界灘の魚はおいしい {トツテ/#ツテ/\*んだって}。

(34) 言ってなかったと思うけど、僕のいとこは大学の先生 {トツテ<sup>10)</sup>/#ツテ/\*んだって}。

この用法は、標準語の「~(な)のだって」には見られないと思われる。また、非ノダ文にツテを接続させても、3.2 節で述べたような伝聞としか解釈されない。

また伝聞の場合とは違い、この用法においては、ツテの後に 2.2 節で示したような文末詞を接続させることはできない。

9) ここでのヤはコンピュータではなく、「明日どこ行くヤ？」のようにも使用できる、疑問を表す文末詞。(30)のヤも同様。

10) 若年層においては、準体助詞トが体言に直接接続できるようになっているため(陣内 1991;2006、陣内・坪内 1995、原田 2007 など)、(34)のようにトが名詞に接続することが可能である。

(32') 聞いてよ、僕、甌島に調査に行くトッテ { $\phi$ /\*ヨ/\*ネ/\*ゼ/\*サ}。

(33') 玄界灘の魚はおいしいトッテ { $\phi$ /\*ヨ/\*ネ/\*ゼ/\*サ}。

(34') 僕のいとこは大学の先生トッテ { $\phi$ /\*ヨ/\*ネ/\*ゼ/\*サ}。

このような事実から、

(35) 聞いてよ、僕、甌島に調査に行くト { $\phi$ /ッテ/ヨ/ネ/ゼ/\*サ}。

のように、ノダ文に接続する場合は、ッテは1つの文末詞として、他の文末詞と意味的な対立をなすものとして扱うべきであるとも考えられる。

この用法の特徴は、引用や伝聞の場合とは違い、話し手以外の何らかの情報源をもとに聞き手に伝達しているわけではなく、話し手自身のことや、話し手の既にもっている知識などをもとに伝達を行っていることである。また、3.3節で示した用法は「話し手と聞き手の知識・認識に違いがあること」が前提になっていたが、この用法では「聞き手が情報量をもたないこと」が前提となっている。簡単に言えば、坪内(2009)が言うように、新情報を伝達するというのがノダ文に接続する場合のッテの基本的な意味となっている。

### 3.4.2. 語用論的特徴

これまで他方言のッテ、あるいは引用マーカ出自の文末詞にも、福岡市若年層方言のッテと類似するような用法があることが報告されている。愛知県尾張方言を例にとると、ノダ文にッテの接続した(ナ)ンダッテが(36)のように用いられ、「話し手自身が知っている情報を聞き手に提供する」機能をもっているという(高見2010)。

(36) 私のお母さんさー、学校の先生やっとなるンダッテ。

また船木(2000a)では、名古屋や大阪府豊中市の若年層方言において、(37)、(38)のように「新規情報を述べる」ッテの使われ方が見られることが記されている<sup>11)</sup>。

(37) 俺、昨日、映画見に行ったんだッテ。それでね…。

(38) 実は、俺、明日は旅行ッテ。

(38)はノダ文ではないが、岐阜市方言の引用マーカ出自のテ(芝田2008)、新潟方言のテ(吉田2009)についても、ノダ文に接続することで聞き手の知らない新情報を述べることができるという。しかしながら、福岡市若年層方言のッテの場合、単に聞き手の知らない新情報を述べるという機能をもっているわけではない。(32)～(34)の例は、一見すると新情報を述べているように見えるが、

(32'') 聞いてよ、僕、甌島に調査に行くト。

(33'') 君は知らないだろうけど、玄界灘の魚はおいしいト。

(34'') 言ってなかったと思うけど、僕のいとこは大学の先生ト。

のように、ッテを接続せずとも文を成り立たせ、聞き手の知らないことを伝達することができる。このことから、当該方言においては新情報を述べる機能を担っているのはノダ文そのものであると言える<sup>12)</sup>。

11) どちらが名古屋方言で、どちらが豊中市方言の例なのかは言及がない。

12) 岐阜市方言においては、対人的ムードのノダ(野田1997)にはテの後接が必須になるという(芝田2008)。

さて、ノダ文にツテを接続させたときとそうでないときの違いは、「話し手にとって、また、聞き手にとってその情報がいかに重要であるか」ということに関係しているようである。つまりツテを接続させることで、話し手の一連の発話の中で、その文がもつ情報が「最も伝えたいことである」ことをマークするようになる。具体的には、(39) のようなものである。

(39) 昨日、天神に行ったト。そしたら芸能人に会ったトツテ！

このような場合、話し手の最も伝えたいことは「天神に行った」ことではなく、「芸能人に会った」ことである。ここで、

(39') #昨日、天神に行ったトツテ。そしたら芸能人に会ったト！

とすると、「天神に行ったこと」が最も伝えたいことになってしまい、不自然である。つまり、(36) の尾張方言の例のように単に新しい話題を導入するだけのときには、ツテを用いることはできないのである。また、

(39'') #昨日、天神に行ったトツテ。そしたら芸能人に会ったトツテ！

のように、すべてにツテを接続させてしまうと、「天神に行った」ことと「芸能人に会った」ことが（実際には違うのに）対等の情報価値をもつことになってしまうため、不自然である。ただし (40) のように、伝えたいことが複数の文に分かれる場合には、ツテをそれぞれの文に接続させることもある。

(40) 先週、やっと就職が決まったトツテ！しかも、第一志望の会社に受かったトツテ！

(40) のような場合、もしどちらにもツテを接続させないと、聞き手は何が重要な情報であるのかが判断できず、まだ話が続きそうな印象さえもってしまう。ツテを接続させることで、とりあえず話し手の伝えたいことはそこで終わったことが含意されるのである。

ノダ文に接続するツテが以上のような機能を担うことから、「実は」を用いるなど、聞き手に事情を打ち明けようとするときには、ツテを接続させる方が自然である。

(41) A：ちゃんとレポートやってきた？

B：実は、まだト {ツテ/??φ}。

### 3.4.3. 「そうツテ」について

最後に、次の例を見られたい。

(42) A：このレポートの締切って、いつかわからないから困るよね。

B：そうト {ツテ/??φ}！それがわからないと困るよね。

この「そうツテ<sup>13)</sup>」という表現は、「聞き手の認識との一致の伝達（船木 2000a）」の機能を果たし、「まさにそのことが自分が思っていたことだ」ということを聞き手に強く訴え

13) この「そうツテ」に限り、

(b) そうツテネ。

のように、文末詞ネのみ接続を許す。「そうツテ」と「そうツテネ」の違いは、ちょうど標準語の「そうなんだよ」と「そうなんだよね」の違いに近いと思われる。

かけるものである<sup>14)</sup>。ツテを付加させないのはかなり不自然である。船木 (2000a) によると、山形市方言の引用マーカ出自のズ (渋谷 2000)、山口方言の引用マーカ出自のチャ (船木 2000b) が、

(43) A: 明日もまた雨だつてよ。たままないな。

B: {ンダズ/それッチャ}。

のように用いられるようであるが、福岡市若年層方言のツテの場合は非ノダ文では、文脈に関わらず非文法的になってしまう。

(42) B: そう {トツテ/\*ツテ}。

この「聞き手の認識との一致の伝達」の用法もまた、福岡市若年層方言のトツテの特徴であると言えよう。

#### 4. ノダ文に接続するツテの用法の発達過程

最後に本節では、3.4 節で述べたノダ文に接続するツテの用法の発達過程について考えてみたい。

ノダ文に接続するツテの用法 (最も伝えたいことをマークする) は、おそらくは 3.3 節で述べたような「話し手との知識・認識のずれの明示の用法」が拡張したものではないかと思われる。この用法は、「話し手と聞き手のもっている情報量が違っていることを伝達する」ものであるが、聞き手の情報量がゼロであっても、「とにかく一方的に話し手の認識を伝達する」という機能が、ノダ文に接続するツテに備わったのではなからうか。これが用いられる条件として、(32) ~ (34) のようにノダ文でなければならない (非ノダ文であってはならない) のは、次のような理由が考えられる。「話し手との知識・認識のずれの明示の用法」とは違い、聞き手は当該情報をもっていない。そこでノダ文が新情報の伝達の機能を担うことで、聞き手に情報がない状態における情報伝達を果たしているのである。つまり、「~トツテ。」という表現は、トが新情報の伝達という基本的な役割を担い、そのうえでツテが「最も伝えたいことをマークする」という機能を担うことで成り立っているのではなからうかと考えられる。ここではノダ文であることは、新情報を伝達するうえで必須の、いわば土台のようなものであり、意味的に重要な役割を果たしているのである。

また、3.2 節で述べた伝聞の用法においては非ノダ文のみを用い、3.4 節で述べたような「最も伝えたいことをマークする用法」においてはノダ文のみを用いることで、形式と用法の関係を明晰化しようとする働きもあったと思われる<sup>15)</sup>。伝統方言で用いられている引用や伝聞を表すテの場合、

(44) 試験に合格したトテネ。(合格したんだつてね) (坪内 2004)

のように、伝聞の用法においても標準語のようにノダ文に伝聞マーカ (テ) を接続させることができる (若年層では用いられない)。伝統方言においては 3.4 節で述べたような、「最も伝えたいことをマークする用法」は用いにくいことから、若年層においてそのような明

14) 渋谷 (2000) の山形市方言のズの記述を参考にした。

15) なぜ文法機能を犠牲にしてまで明晰化が働く必要があるのかについては、今後の課題とする。

晰化の働きが起こったという考え方は妥当であると考えられる。これが、3.2 節で述べた伝聞の用法においてノダ文を用いることが不可能である、つまり、非ノダ文だけしか用いられない理由ではなからうか。

## 5. まとめと今後の課題

本稿で記述を行った福岡市若年層方言のツテの特徴は、以下のようにまとめられる。

- (a) ツテは伝聞の用法においては、ト（標準語のノダに相当する）に接続することはできない（2.1 節）。引用・伝聞の場合、文末詞はヨ・ネ・ゼ・サが共起できる（2.2 節）。
- (b) ツテの基本的な用法は、標準語の「って」と同じく引用と伝聞である（3.1、3.2 節）。また、話し手との知識・認識のずれを明示する用法がある（3.3 節）。ノダ文に接続するツテは文末詞的な用法をもち、ツテが接続した文が「一連の発話のうち、話し手の最も伝えたいことである」ことをマークする（3.4.1 節）。また、「そうツテ」という表現は、「聞き手の認識との一致」を表す（3.4.3 節）。
- (c) ノダ文に接続するツテの用法（最も伝えたいことをマークする）は、話し手との知識・認識のずれを明示する用法が拡張したものであると考えられる。また、伝聞には非ノダ文を、最も伝えたいことをマークする用法にはノダ文を用いるという明晰化の働きも見られる（4 節）。

以上のようなことが明らかになったわけであるが、ツテがノダ文に接続する場合、似たような談話機能をもって使われることの多い、ト・ツタイ（<トタイ）・ツチャガ（<トヤガ）・ツチャン（<トヤモノ?）などの表現との異同について今後明らかにする必要がある（すべて準体助詞トを含むノダ文）。また、伝統方言のゲナ・テとの対照も必要となろう。

### 【参考文献】

- 加藤陽子（2007）「話し言葉における引用標識の発話末用法の機能」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』30, pp.1-29, アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター。
- 芝田卓哉（2008）「岐阜市方言の文末詞「テ」」『阪大社会言語学研究ノート』8, pp.46-54, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室。
- 渋谷勝己（2000）「山形市方言における文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2, pp.8-17, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室。
- 陣内正敬（1991）「博多方言文末助詞「ト」の新用法と語彙拡散」『九大言語学研究室報告』12, pp.51-59, 九州大学文学部言語学研究室。
- （1993）『地方中核都市方言調査報告——福岡市・北九州市——』九州大学言語文化部日本語科。
- （2006）「方言の年齢差——若者を中心に——」『日本語学』25-1, pp.42-49, 明治書院。
- ・坪内佐智世（1995）「地元意識と開放性の共存する都市方言」『言語』24-12, pp.150-165, 大修館書店。
- 高見あずさ（2010）「愛知県尾張方言における文末形式「ツテ」の記述的研究」『日本方言研究

- 会第 91 回研究発表会発表原稿集』, pp.11-18, 日本方言研究会.
- 辻加代子 (2001) 「東京方言「ッテ」と「ッテバ」の用法について——文末詞的用法を中心に——」『阪大社会言語学研究ノート』3, pp.77-93, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 坪内佐智世 (2004) 「「伝聞」の「そうだ」とそれに対応する福岡市博多方言の伝聞形式」『福岡教育大学紀要』53, pp.41-50, 福岡教育大学.
- (2009) 「「温泉旅行が当たったってー！」——新情報とは?——」第 27 回九州方言研究会発表資料.
- 楢田良照 (1992) 「福岡市及び周辺地域の方言の新しい現象について」『佐賀大國文』20, pp.48-56, 佐賀大学教育学部国語国文学会.
- 二階堂整 (1998) 「福岡・北九州方言の動態」真田信治 (編) 『九州におけるネオ方言の実態』 pp.33-41, 科研費報告書.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- 原田走一郎 (2007) 「若年層の福岡方言における「ート」の接続について」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』2, pp.170-177, 東京外国語大学記述言語学研究室.
- (2009) 「九州方言の繫辞動詞」『日本語文法学会第 10 回大会発表予稿集』pp.91-96, 日本語文法学会.
- 藤田保幸 (2003) 「伝聞研究のこれまでとこれから」『言語』32-7, pp.22-28, 大修館書店.
- 船木礼子 (2000a) 「引用表現形式に由来する文末詞の対照——山形市方言ズ、山口方言チャ、東京方言ッテ・ッテバについて——」『阪大社会言語学研究ノート』2, pp.35-46, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- (2000b) 「山口方言の文末詞チャ」『阪大社会言語学研究ノート』2, pp.25-34, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 松尾弘徳 (2009) 「新方言としてのとりたてて詞ゲナの成立——福岡方言における文法変化の一事例——」『語文研究』107, pp.61-77, 九州大学国語国文学会.
- 吉田雅昭 (2009) 「新潟方言の文末詞「テ(バ)」について」『国語学研究』48, pp.58-71, 東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会.

---

ひらつか ゆうすけ (大阪大学大学院生)

yusukehiratsuka@hotmail.com